

# まちづくりコラボレーションーさいたまプロジェクトー

## サテライトラボ上尾の概要

大宮キャンパスから車で約15分ほどの所にある埼玉県上尾市の原市団地では、上尾市内でも高齢化が進んでいる地域であり、他の団地に比べて自治会活動が萎縮しつつある傾向がみられる。そのため、本学では2013年に団地内の空き店舗を改修し「サテライトラボ上尾」を開設し、地域の課題解決に係る研究・教育・交流拠点としての機能を高めてきた。学生のアイデアや、様々な団体とのコラボレーションによって、地域の課題解決の糸口を切り開いていく。

《サテラボ運営委員会》

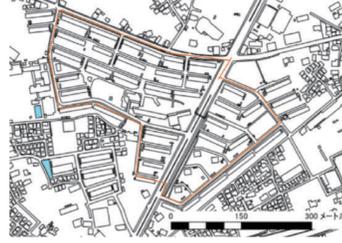
月に1回行なわれ、地域の課題に対して各団体の活動の情報を共有し、団体間の連携を行なう。

《運営委員会参加団体一覧》

原市団地自治会、上尾市、UR都市機構、URコミュニティ、白樺団地自治会、上尾看護専門学校、社会福祉協議会、コープみらい、NPO法人ヒューマンシップコミュニティ etc.



〈サテラボ運営委員会〉



〈原市団地白地図〉



〈サテライトラボ上尾〉

## 運営中のサードプレイス

### 原市カフェ

2016年度から始まった原市カフェは、「食」をテーマに石窯を活用したコミュニティカフェで、毎月第2土曜日に実施している。白樺団地自治会長と原市団地ボランティア、芝浦学生の協力の元、行なっており、ピザやコーヒーを販売している。来客数も年々増加傾向にあり、原市団地の主要イベントとして機能している。



〈ピザを焼いている様子〉



〈7月原市カフェ〉



〈2月原市カフェ〉

### 屋台居酒屋

2018年8月から始まった屋台居酒屋は、男性高齢者の地域コミュニティ参加率の改善を目的としたイベントであり、毎月第3土曜日に実施している。地元住民や芝浦学生が中心となって活動しており、アルコール類やおつまみを販売している。



〈5月屋台居酒屋〉



〈9月屋台居酒屋〉



〈協力住民の方〉

### ゲームカフェ

2019年5月より始まったゲームカフェは、子ども達の居場所作りを目的としたイベントであり、屋台居酒屋と同日に実施している。社会福祉協議会と大学で協同開催しており、原市団地周辺に住む子ども達と大学生がトランプやオセロ等のゲームで遊び、交流している。また大人の参加もあり、コマやけん玉といった昔遊びを高齢者に教わっている様子も見られる。7月からは軽食(おにぎり等)を提供しており、子ども食堂のような側面も持っている。



〈9月ゲームカフェ〉



〈12月食事の様子〉



〈2月ゲームカフェ〉

ゲームの種類	
令和元年5月から	オセロ・人生ゲーム・トランプ・塗り絵・折紙
令和元年10月から	けん玉・駒・竹とんぼ・将棋・囲碁・かるた
イベント	キャプテン・リノ・ミニオンボカボンゲーム バランスボール 流しそうめん(8月)・人工芝の設置(9月)・ベタンク体験(10月)・ポッチャ体験(11月)

〈用意しているゲーム〉

## ゲームカフェの効果

子ども × 高齢者

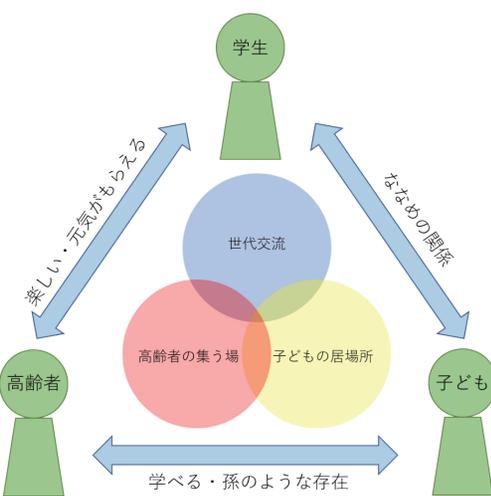
子どもは高齢者から様々な事を学べ、高齢者は子どもと孫のように遊べる。

子ども × 学生

「ななめの関係」を築くことができ、兄弟・姉妹のような関係で接する事が出来る。

学生 × 高齢者

高齢者は若い人から元気をもらえ、学生は社会のルール等を学ぶ事ができる



## 他団体との連携・メディア掲載

### 学生子ども食堂ネットワーク

学生が主体となって運営している子どもの居場所同士を繋ぐネットワーク。2019年10月に発足した。当研究室は8月に行なわれたプレイベントにて事例発表をさせていただいた。現在は月に1回のビデオ通話にて情報共有を行なっている。



〈8月全国大会プレイベントの様子〉



〈8月全国大会プレイベントのチラシ〉

### どこでも知事室

埼玉県知事である大野氏による、県民から直接意見を聞き、県政に活かそうという政策。第1回では子どもの居場所を運営する6人と知事との意見交換が行なわれた。当団体からも1名参加させていただき、学生という立場からの意見を述べた。



〈どこでも知事室〉



〈テレビ埼玉のニュース〉

## 他学科との連携

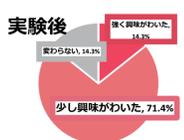
本学電子情報システム学科井上研究室で取り組まれている研究でも、原市団地をフィールドとした共同研究による地域貢献を行なっている。

### ① 音声対話を用いたエンディングノート生成システムの開発

研究では、団地住民に実際に音声対話システム alexa を利用してもらい、利用者からの意思表示等のデータ収集が行なわれた。課題はあるものの、システムの有用性が示唆された。



〈実験の様子〉



〈興味関心の向上〉



〈提案システム概要図〉

〈開発システム構成図〉

② 音声対話を用いた副薬管理システムの開発  
団地住民に音性対話システム Echo を利用してもらい、データ分析を行なったところ、音声による通知が有効であることがわかった。